

# 老年看護学実習を通して看護学生が捉えた老年看護の役割 (第2報)

## CONCEPTS OF GERIATRIC NURSING BY STUDENTS DURING THE CLINICAL PRACTICE OF GERIATRIC NURSING (PART 2)

桑 田 恵美子 ・ 山 本 和 江  
KUWATA Emiko, YAMAMOTO Kazue

キーワード：高齢者，看護学生，老年看護学実習，老年看護の役割

Key Words：elderly people, nursing student, clinical practice of geriatric nursing, concept of geriatric nursing

### 要 旨

本研究は老年看護学実習を通して、看護学生が捉えた老年看護の役割を明らかにすることにより老年看護学実習の効果と課題を明らかにする。対象は老年看護学実習を履修した3年生86名とした。質的記述的研究方法を用いて老年看護学実習で記載した老年看護の役割を分析した。結果、8カテゴリー及び23サブカテゴリーが生成された。学生が捉えた老年看護の役割は、【加齢や疾患を理解して普段と異なる変化を観察】【身体機能を維持して生活の質向上への支援】と、長い人生経験を持つ高齢者へのかかわり方として【自尊心や自信を支える支援】【意思を尊重した支援】が必要であると捉えていた。また、【気持ちに寄り添い、希望を叶える支援】【退院後、多職種が連携して高齢者と家族が安心して暮らせる支援】【認知症の人と家族が安心できる支援】を通して、【安らかな死への支援】が必要であると捉えていた。

### Abstract

This study focuses on the effects of the clinical practice of geriatric nursing on concepts, which nursing students have, about the geriatric nursing. The investigation was conducted to 86 students who were third-grade, learning the clinical practice of geriatric nursing. The method used qualitative descriptive study. The data is categorized as 8 main categories, 23 subcategories. In detail, the 8 main categories for their concepts of the geriatric nursing are “observing changes in the elderly”, “support for improving quality of life by maintaining physical function”, “support for self-esteem and

confidence”, “support that respects the will”, “support to fulfill the wishes”, “support for elderly people and their families to live with peace of mind after discharge”, “support for the life of elderly people with dementia and their family caregivers”, “support for restful death”.

## 緒 言

老年看護は、高齢者をどのように理解するかという「対象論」と、高齢者へ働きかける「方法論」により、質の高い実践をめざしている。対象の理解が深まるほど、その人にあった働きかけ方が生み出されてくるという、対象との関係性の中で変容していくと太田 [1] は述べている。高齢者をどのように理解するかが、看護の質・内容を定めるものとなり、高齢者を多様な視点から理解を深めることが重要となる。また高齢者理解が深まることは、その人にあった働きかけが生み出され、質の高い看護実践につながる。さらに学生にとって老年看護の役割の理解を深めることにつながる。

老年看護学の看護実践を高める教育の目指すものは、あらゆる健康状態にある高齢者が生の完成をめざして、老年期を健やかで、自立した、快適な生活を送れるように、健康面からの支援が的確にできることであると大淵 [2] は述べている。看護基礎教育において、高齢者を多様な視点から理解できる能力、高齢者その人にあった質の高い看護実践能力の育成は重要である。

老年看護学実習における看護実践、看護の役割に関する先行研究では、高齢者の生活を支える看護技術教育に関する報告 [3]～[6]、実習における学生の学びにみる看護師に求められる役割に関する報告 [7] [8]、老年看護学実習で捉えた看護観 [9] があった。しかし学生の捉えた高齢者観が、看護の役割にどのように関係していたのか明らかにしている研究はほとんど見当たらない。

桑田ら [10] は老年看護学実習を通して学生が捉えた高齢者観について第1報で報告した。しかし同対象が捉えた高齢者観が、老年看護の役割にどのように関連していたのか明らかにしていない。その第2報として3年次の老年看護学実習で捉えた高齢者観が、老年看護の役割にどのように

影響していたのか明らかにすることは、高齢者その人にあった働きかけを生み出す、質の高い看護実践の教育につながると推測する。また老年看護学実習の効果と課題を明らかにすることにつながる。

## I. 研究目的

1. 老年看護学実習を通して看護学生が捉えた老年看護の役割を明らかにする。
2. 老年看護学実習を通して看護学生が捉えた高齢者観が老年看護の役割にどのように関連していたのか明らかにする。

## II. 研究方法

### 1. 研究デザイン

質的記述的研究

### 2. 研究期間

2019年5月～2022年5月

### 3. 対象者

対象者は老年看護学実習を履修した3年生86名とした。学生は2年生より老年看護学（老年看護学概論1単位、老年看護学援助論Ⅰ1単位、老年看護学援助論Ⅱ2単位）を履修した。3年生では、老年看護学実習3単位（病院実習2単位、介護老人保健施設1単位）を履修した。

### 4. データ収集法

老年看護学実習の実習課題である「看護実践を通して、老年看護の役割についてどのように理解できたか」について、高齢者観とともに老年看護の役割について指定の用紙に自由に記載してもらった。実習終了後、他の記録物と共に提出された実習記録をデータとした。

## 5. 分析方法

提出された実習記録を質的記述的研究方法 [11] にもとづき分析した。分析の視点：「看護学生は老年看護学実習を通してどのような老年看護の役割を学ぶことができたのか」の部分抽出した。文脈ごとに類似性・規則性、特殊性を観察し、質的データを意味のまとまりごとに分類し「コード」[11]とした。[コード]から全体の感覚をつかみ、何度も読みそこにある老年看護の役割を発見した。また真実性と妥当性 [12] を確保するため、恣意的なデータ変更、飛躍しすぎた解釈になっていないか、解釈、定義、サブカテゴリーをデータと確認しながら整合性を高めた。抽象度を上げて〈サブカテゴリー〉から【カテゴリー】を生成、どのようなカテゴリーであるのか説明し、サブカテゴリーが含まれていることを確認した。【カテゴリー】は、共通性や多様性を分析し全体像を図に示した。全体像は、老年看護学実習における学生が捉えた老年看護の役割、老年看護学実習における学生が捉えた高齢者観と老年看護の役割の関連を図とした。

## 6. 倫理的配慮

老年看護学実習評価終了後、学生の実習記録を使用するにあたり、対象者に口頭で研究の趣旨および内容について説明し、同意を得た。研究への協力は対象の自由意思によるもので、拒否が可能であること、拒否によって成績上何ら不利益を生じないことを説明した。得られたデータは研究者のみが取り扱い、本研究以外で使うことがないことを説明した。また本研究結果は論文などで発表するが、その際個人情報に関することは、個人が識別されないようにコード化した上で使用することを伝え、学生より承認を得た。

## Ⅲ. 結果

老年看護学実習を履修した86名の実習記録を分析した結果、8カテゴリーと23サブカテゴリー、116コードが生成された。カテゴリーは【】、サブカテゴリーは〈〉、コードは「」で示す。更

にこれらのカテゴリー間に内在する関連性から老年看護学実習で学生が捉えた老年看護の役割の全体像を述べる。また先に桑田ら [9] が報告した高齢者観と本調査結果より得られた老年看護の役割との関連の全体像を述べる。

### 1. 老年看護学実習における学生が捉えた老年看護の役割の全体像（図1）

老年看護学実習における学生が捉えた老年看護の役割は、8カテゴリーから構成されていた。老年看護の役割を【加齢や疾患を理解して普段と異なる変化を観察】【身体機能を維持して生活の質向上への支援】と、長い人生経験を持つ高齢者への関わり方として【自尊心や自信を支える支援】【意思を尊重した支援】が必要であると捉えていた。また、【気持ちに寄り添い、希望を叶える支援】【退院後、多職種が連携して高齢者と家族が安心して暮らせる支援】【認知症の人と家族が安心できる支援】を通して、【安らかな死への支援】と捉えていた。

### 2. 各カテゴリーについて

各カテゴリーを構成するサブカテゴリーとその定義及び、コードについて述べる。

#### 1) 【加齢や疾患を理解して普段と異なる変化を観察】

【加齢や疾患を理解して普段と異なる変化を観察】とは、高齢者の加齢変化や疾患を理解した普段と異なる変化を観察して健康管理を示す。

2 サブカテゴリー〈普段と異なる変化をつかむ〉〈加齢や疾患を理解したセサメントや援助を工夫〉が含まれていた。

##### (1) 〈普段と異なる変化をつかむ〉

定義：訴えの少ない高齢者の日々の変化を観察して健康管理を行うこと。

8コード、「普段の様子を知った上で、異常に気づくことが重症化を防ぐことにつながる」等があった。

##### (2) 〈加齢や疾患を理解したアセスメントや援助

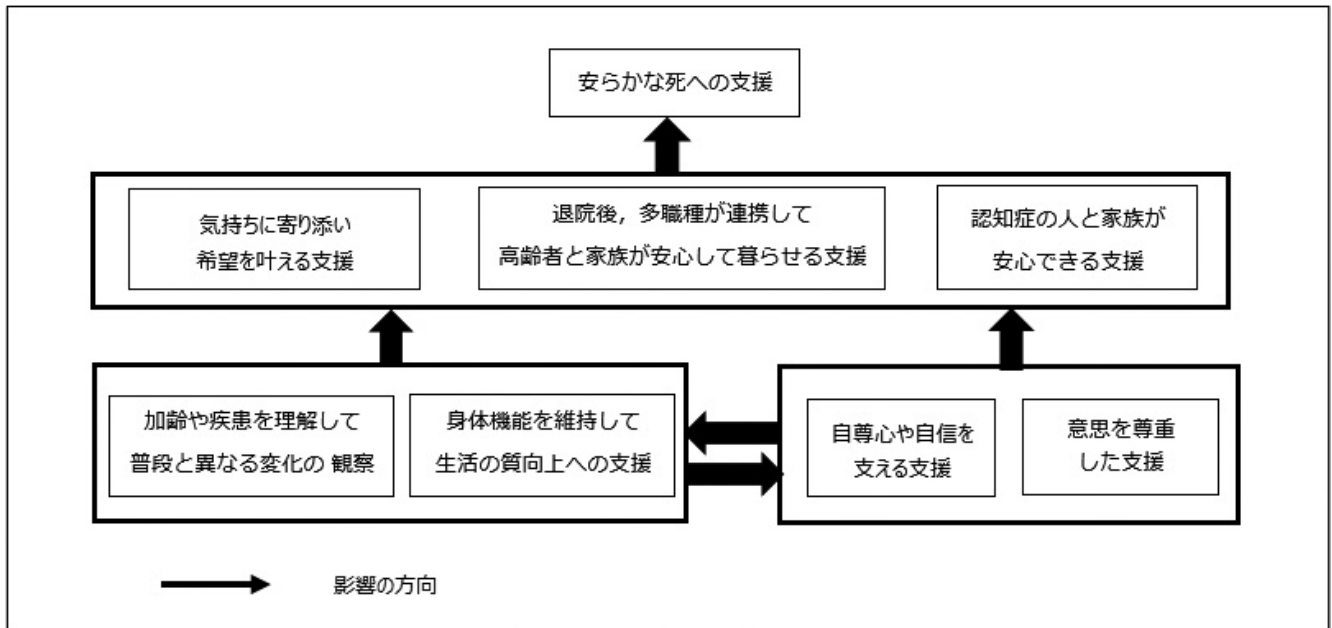


図1. 老年看護学実習における学生が捉えた老年看護の役割の全体像

を工夫)

定義：加齢や疾患を理解したアセスメントや援助の工夫が大切であること。

7コード、「加齢による機能低下の状態をアセスメントし、ケアにつなげる」「加齢による体温低下が起こりやすいので、寒さへの配慮を行うことも大切である」等があった。

2) 【身体機能を維持して生活の質向上への支援】

【身体機能を維持して生活の質向上への支援】とは、もてる力を引き出し、身体機能を維持して高齢者の生活の質向上への支援を行うことを示す。

6サブカテゴリー、〈身体機能を維持し悪化予防〉〈疾病を予防して健康増進〉〈転倒・転落の予防〉〈身体拘束の早期解除への援助〉〈経口から摂取できる支援〉〈もてる力を引き出す支援〉が含まれていた。

(1) 〈身体機能を維持し、悪化予防〉

定義：身体機能を維持して悪化させないよう支援すること。

11コード、「目指しうる最大の生活機能の維持・回復を促す」「現状を維持し、悪化しないように援助を継続する」等があった。

(2) 〈疾病を予防して健康増進〉

定義：疾病を予防して健康増進の支援をすること。

1コード、「疾病を予防して健康増進をサポートする」があった。

(3) 〈転倒・転落の予防〉

定義：高齢者の転倒・転落の危険を予測し、予防すること。

6コード、「転倒・転落のリスク要因を確認し、予防していくことが必要である」「安全な環境で過ごすことのできる支援」等があった。

(4) 〈身体拘束の早期解除への援助〉

定義：身体拘束を早期解除できるよう援助すること。

1コード、「身体拘束を受けている高齢者では、早く拘束が解除できる工夫が必要である」があった。

(5) 〈経口から摂取できる支援〉

定義：生活の質向上のため経口摂取ができるよう支援すること。

1コード、「なるべく口から摂取できる支援は生活の質向上につながる」があった。

(6) 〈もてる力を引き出す支援〉

定義：もてる力・残存機能を活かし支援すること。

7コード、「その人がもてる力を最大限引き出し、それを維持できるように支援」「できている点に視点を置き、援助を行うことでADLの低下を防ぐことができる」等があった。

### 3) 【自尊心や自信を支える支援】

【自尊心や自信を支える支援】とは、長い人生を生きてきた高齢者の自尊心や自信を支える支援を示す。

2サブカテゴリー〈自信につながる支援〉〈自尊心を尊重した関わり〉が含まれていた。

#### (1) 〈自信につながる支援〉

定義：自信につながる支援をすること。

3コード、「時間をかけてでもできたという自信につながるような関わりをする」「出来ていることを伝え、自信につなげる」等があった。

#### (2) 〈自尊心を尊重した関わり〉

定義：自尊心を尊重した関わりをすること。

5コード、「自分で出来ることを減らさないことが、自尊心の維持につながる」「常に尊敬の心を忘れず、自尊心を傷つけない気持ちをもって関わるのが大切」等があった。

### 4) 【意思を尊重した支援】

【意思を尊重した支援】とは、長い人生を生きてきた高齢者の意思を尊重した支援を示す。

2サブカテゴリー〈長い人生を生きてきた高齢者を尊重した関わり〉〈意思表出・意思決定の支援〉が含まれていた。

#### (1) 〈長い人生を生きてきた高齢者を尊重した関わり〉

定義：長い人生を生きてきた高齢者を尊重して関わること。

10コード、「人生の先輩であることを考慮したコミュニケーションが大切」「その人なりにできることを尊重して関わる」等があった。

#### (2) 〈意思表出・意思決定の支援〉

定義：意思表出や意思決定を支援すること。

9コード、「高齢者の意思表明を促したり、意

思を伝えられるようにする支援」「その人の長い人生から考え・行動が出てくるため、思いを尊重した支援が重要」等があった。

### 5) 【気持ちに寄り添い、希望を叶える支援】

【気持ちに寄り添い、希望を叶える支援】とは、高齢者の気持ちに寄り添い、その人らしく生きることができるよう支援を示す。

3サブカテゴリー〈希望を叶え、その人らしく生きることへ支援〉〈その人に合わせたケア〉〈気持ちに寄り添う支援〉が含まれていた。

#### (1) 〈希望を叶え、その人らしく生きることへ支援〉

定義：その人の希望や、その人らしい生活ができるような支援をすること。

8コード、「高齢者が望む姿・生活を送ることができるよう援助する」「自分の人生が良かったと思ってもらえる支援」等があった。

#### (2) 〈その人に合わせたケア〉

定義：多様な高齢者の、その人に合わせたケアをすること。

5コード、「生活史を知り、その人に合ったケアを行う」「その人の意向やそれまで生活してきた場所に近い空間をつくる」等があった。

#### (3) 〈気持ちに寄り添う支援〉

定義：高齢者の気持ちに寄り添う支援を示す。

3コード、「がんの終末期にある高齢者の退院したい気持ちに寄り添うことも看護である」「自宅退院できず施設入所予定の方の気持ちを傾聴することも看護師の役割である」等があった。

### 6) 【退院後、多職種が連携して高齢者と家族が安心して暮らせる支援】

【退院後、多職種が連携して高齢者と家族が安心して暮らせる支援】とは、退院後、多職種が連携・協働して高齢者と家族が安心して過ごせる支援を示す。

4サブカテゴリー〈多職種で連携して高齢者と家族の希望を叶える〉〈多職種と連携して体調管理〉〈退院後安心して過ごせる支援〉〈家族の介護負担を軽減する支援〉が含まれていた。

(1) 〈多職種で連携して高齢者と家族の希望を叶える〉

定義：それぞれの専門性を発揮して多職種で連携・協働して高齢者とその家族が希望する生活を叶えること。

6コード、「高齢者とその家族が希望する生活を営むことができるよう、多職種と連携して最善のサービスを提供できるようにしなければならない」「切れ目のない支援を行うため多職種で情報共有を行い、専門性を活かしていくことが大切」等があった。

(2) 〈多職種と連携して体調管理〉

定義：多職種と連携して高齢者の体調管理をすること。

1コード、「介護福祉士などと多職種と連携して体調管理」があった。

(3) 〈退院後安心して過ごせる支援〉

定義：退院後、高齢者が自分らしく安心して過ごせるような支援をすること。

9コード、「退院後健康、生活上のリスクを最小にする支援が重要である」「療養者の生活の場での、フォーマル・インフォーマルな資源について理解することが必要」等があった。

(4) 〈家族の介護負担を軽減する支援〉

定義：家族のニーズに応じた介護負担を軽減する支援をすること。

4コード、「高齢者とその家族が希望する生活を営むことができるよう、多職種と連携して最善のサービスを提供できるようにしなければならない」「切れ目のない支援を行うため多職種で情報共有を行い、専門性を活かすことが大切」等があった。

7) 【認知症の人と家族が安心できる支援】

【認知症の人と家族が安心できる支援】とは、認知症の人と家族に寄り添う安心できる支援を示す。

2サブカテゴリー〈認知症の人を介護する家族支援〉〈認知症の人が安心できる環境をつくる〉が含まれていた。

(1) 〈認知症の人を介護する家族支援〉

定義：認知症高齢者を介護する家族支援が必要であること。

1コード、「認知症の人と暮らす家族の負担を減らすケアが必要」があった。

(2) 〈認知症の人が安心できる環境をつくる〉

定義：認知症その人に寄り添う安心できる支援が大切であること。

8コード、「認知機能が低下した人は、不安や寂しさに敏感であるためその人に寄り添って安心できる環境をつくることが大切」「笑顔で穏やかなトーンで話すことが大切である」等があった。

8) 【安らかな死への支援】

【安らかな死への支援】とは、死生観を育み、高齢者の安らかな死を支援することを示す。

2サブカテゴリー〈死生観を育む〉〈看取り支援〉が含まれていた。

(1) 〈死生観を育む〉

定義：高齢者の安らかな死を支えることができるよう死生観を育むこと。

1コード、「高齢者がより良い死を迎えられるように看護者は自らの死生観を育てていくことが重要」があった。

(2) 〈看取り支援〉

定義：高齢者・家族の看取りを支援すること。

1コード、「死が身近な方・家族への看取り支援は重要」あった。

3. 老年看護学実習における学生が捉えた高齢者観と老年看護の役割の関連 (図2)

老年看護学実習における学生が捉えた高齢者観 [10] 8カテゴリーについてはすでに報告している。本調査結果で得られた老年看護の役割8カテゴリーとの関連性をみる。高齢観に関するカテゴリーは、老年看護の役割と区別するため【】を使用する。

学生は高齢者を、【外見と異なる身体の老化と病気】【気持ちが先走り無理をする】【安心できる住み慣れた場の暮らし】【セルフケアを通して生活維持を願う】と捉えたため、【加齢や疾患を理解して普段と異なる変化を観察】【身体機能を維

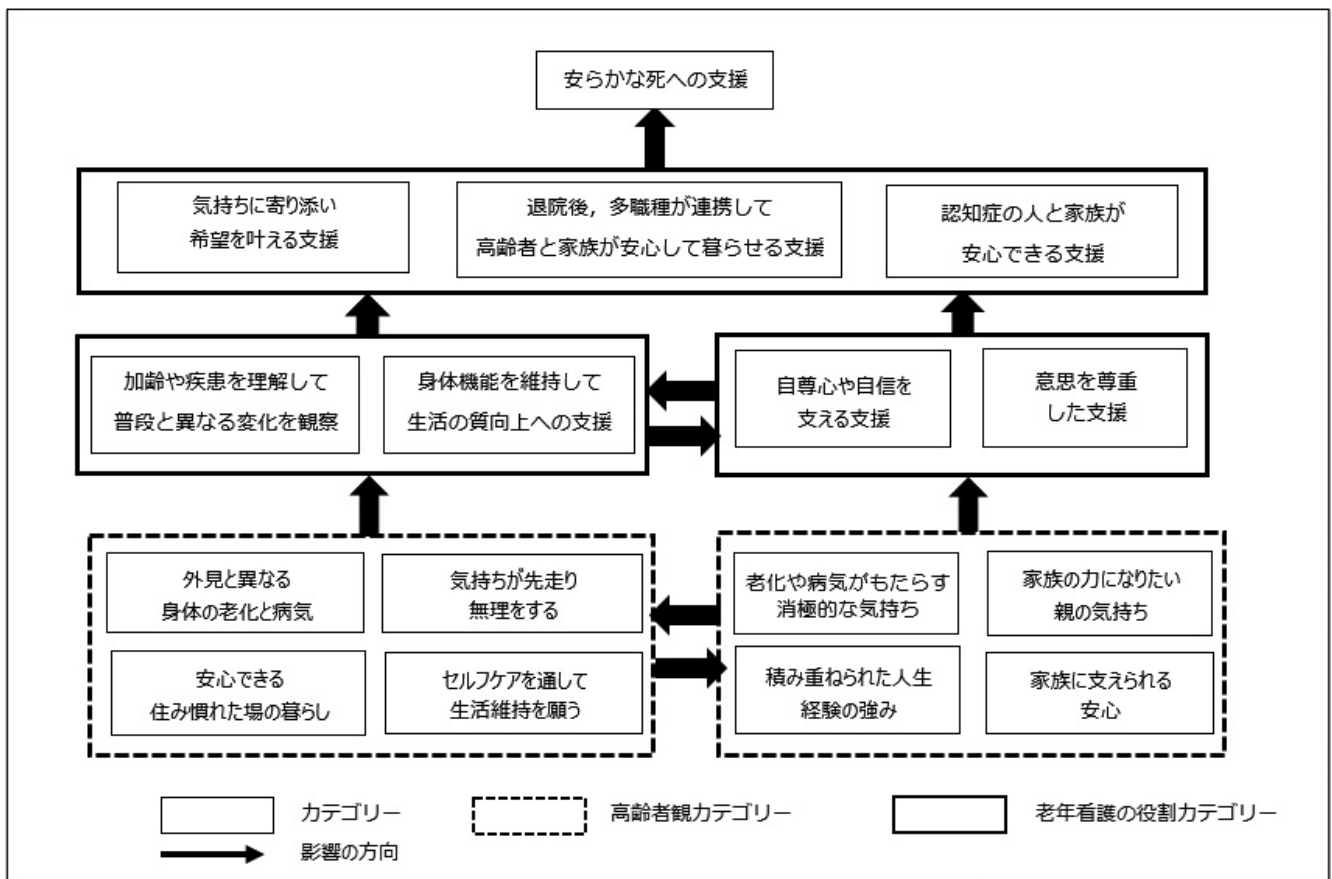
持して生活の質向上への支援】を老年看護の役割としていた。また高齢者を『老化や病気がもたらす消極的な気持ち』『家族の力になりたい親の気持ち』がある反面、『積み重ねられた人生経験の強み』『家族が支える安心』と捉えていたため、【自尊心や自信を支える支援】【意思を尊重した支援】を老年看護の役割としていた。そして【気持ちに寄り添い、希望を叶える支援】【退院後、多職種が連携して高齢者と家族が安心して暮らせる支援】【認知症の人と家族が安心できる支援】を通して、【安らかな死への支援】が必要であると捉えていた。

#### IV. 考 察

本研究は、老年看護学実習を通して学生が捉えた高齢者観の報告 [9] に引き続き、第2報として老年看護の役割を分析した。その結果、8 カテゴリー及び23サブカテゴリーが生成された。学生が捉えた老年看護の役割は、【加齢や疾患を理

解して普段と異なる変化を観察】【身体機能を維持して生活の質向上への支援】と、長い人生経験を持つ高齢者への関わり方として【自尊心や自信を支える支援】【意思を尊重した支援】であった。また、【気持ちに寄り添い、希望を叶える支援】【退院後、多職種が連携して高齢者と家族が安心して暮らせる支援】【認知症の人と家族が安心できる支援】を通して、【安らかな死への支援】であった。

【加齢や疾患を理解して普段と異なる変化を観察】は、〈普段と異なる変化をつかむ〉〈加齢や疾患を理解したセサメントや援助を工夫〉から成る。桑田らの調査 [10] から高齢者を『外見と異なる身体の老化と病気』と捉えていたため、学生は老年看護の役割として高齢者の観察の重要性をあげたのではないかと推測していたが同様の結果であった。長澤らの調査 [7] でも、高齢者の『健康状態の維持・管理』としてアセスメントの重要性を学生が学んでいたことをあげている。高齢者ケアの実践を通して個別の健康状態に合わせた援



助の難しさや重要さを理解することにつながったと推測する。

【身体機能を維持して生活の質向上への支援】は、〈身体機能を維持し悪化予防〉〈疾病を予防して健康増進〉〈転倒・転落の予防〉〈身体拘束の早期解除への援助〉〈経口から摂取できる支援〉〈もてる力を引き出す支援〉から成る。大淵 [2] は、老年看護の実践は高齢者のもてる力を最大限に生かし、できるだけ高いレベルの健康状態で過ごすことができるように高齢者個人の生き方に働きかける活動であると報告している。老年看護学実習を通して学生は、高齢者の〈もてる力を引き出す支援〉をしながら、できるだけ高いレベルの健康状態で過ごすことができるよう〈疾病を予防して健康増進〉〈転倒・転落の予防〉〈身体機能を維持し悪化予防〉の重要性を学んでいた。特に高齢者では転倒・転落のリスクが高く、安全を配慮した看護が求められるため、実習を通して理解が深められたことは重要である。また学生は高齢者を『気持ちが先走り無理をする』と捉えていたため、無理をすることが転倒・転落につながりうることを、実習を通して学び、配慮することの必要性を学ぶことできていたと推測する。〈経口から摂取できる支援〉は、高齢者にとって口から食べられることは生きることであり、楽しみであるため、経口から摂取できる支援は高齢者の生きること、楽しみを支援することである。また生活の質向上への支援である。〈身体拘束の早期解除への援助〉は、身体拘束という特殊な状況下に置かれている高齢者の人権擁護や、生活の質の観点から本来あるべき姿ではない状況を早期に解除する重要性を学んでいた。齋藤ら [13] は高齢者の身体拘束について、高齢者や家族の立場からの思いを汲み取り、身体拘束しない重要性を学生が学んでいたことを報告している。本研究では早期解除の重要性は学んでいたが、高齢者や家族の立場から思いを汲み取る記述はなかった。臨床に触れることを通して身体拘束が行われる現場の状況を受け入れていることが推測される。そのため身体拘束については、現場の状況を受け入れるだけでなく、批判的思

考や高齢者の尊厳を守る身体拘束しない援助の視点を引き出す教育方法の検討も必要である。

【自尊心や自信を支える支援】【意思を尊重した支援】は、長い人生を生きてきた高齢者への関わり方として重要な視点である。学生は高齢者を『老化や病気がもたらす消極的な気持ち』『家族の力になりたい親の気持ち』をもっている反面、『積み重ねられた人生経験の強み』『家族が支える安心』と捉えていたことと関連している。【自尊心や自信を支える支援】は〈自信につながる支援〉〈自尊心を尊重した関わり〉から成る。【意思を尊重した支援】は〈長い人生を生きてきた高齢者を尊重した関わり〉〈意思表示・意思決定の支援〉から成る。太田 [1] は、高齢者は生産性がなくとも、周りのものをほっとさせてくれるという「存在自体の価値」をもっており、価値の多様性があることを気づかせると報告している。『老化や病気がもたらす消極的な気持ち』『家族の力になりたい親の気持ち』をもっている高齢者理解しているからこそ、自尊心や自信を支える重要性を学ぶことができたと推測する。大淵 [2] は、高齢者とのコミュニケーションは敬意をもって関わり、個人として尊重した対応は円滑なコミュニケーションとなり、良好な人間関係を気づけると報告している。実習を通して学生が高齢者の自尊心・自信を支え、意思を尊重する大切さを学べたことは、高齢者との良好な信頼関係を築けた結果ではないかと推測する。

【気持ちに寄り添い、希望を叶える支援】【退院後、多職種が連携して高齢者と家族が安心して暮らせる支援】【認知症の人と家族が安心できる支援】は、高齢者と家族が安心して生活できる支援である。【気持ちに寄り添い、希望を叶える支援】は〈希望を叶え、その人らしく生きることへ支援〉〈その人に合わせたケア〉〈気持ちに寄り添う支援〉から成る。【退院後、多職種が連携して高齢者と家族が安心して暮らせる支援】は、〈多職種で連携して高齢者と家族の希望を叶える〉〈多職種と連携して体調管理〉〈退院後安心して過ごせる支援〉〈家族の介護負担を軽減する支援〉から成る。



【認知症の人と家族が安心できる支援】は〈認知症の人を介護する家族支援〉〈認知症の人が安心できる環境をつくる〉から成る。高齢者の気持ちに寄り添いながら、多職種で連携して高齢者や認知症高齢者と家族が安心して生活できるような支援は、地域包括ケアシステムの目指すところである。多職種が連携して高齢者と家族の希望を叶え、安心して生活できる支援を学べたことは老年看護学実習として有効であったと言える。

【安らかな死への支援】は、学生が自己の死生観を育み、高齢者の安らかな死を支援することである。【安らかな死への支援】は〈死生観を育む〉〈看取り支援〉から成る。老いの延長線上に死はある。日本の人口の高齢化は著しく、75歳以上人口は増加を続け、2018年には65～74歳人口を上回り、その後も2054年まで増加傾向が続くものと見込まれている[14]。今後看護職が、多様な場で高齢者の死に直面することが多くなることが推測される。〈死生観を育む〉必要性を学生が実習を通して学べたことは意義があった。加藤ら[15]は、死の迎え方について、生きていることの大切さや意味を考えさせ、死を否定的側面だけでなく肯定的に捉えることのできる死生観を醸成させていく必要であると報告している。学生の死生観を育み、人生の最終段階を生きる高齢者の安らかな死を支える医療・ケアチームの一員として、高齢者と家族が安心できる質の高い看護実践ができる人材の育成が必要である。また加藤ら[15]は、学生と高齢者の死生観の相違を理解させ、高齢者の理解を促す必要があると報告している。今後、高齢者の安らかな死を支えるため学生の死生観を醸成する教育方法の検討も必要である。

## 本研究の限界と今後の課題

本研究は、3年生を対象とした老年看護学実習を通して、学生が捉えた高齢者観及び老年看護の役割を明らかにしたものである。高齢者観とともに老年看護の役割の理解を豊かにしていくためには、その年度で学生の状況が異なるため、研究として蓄積し看護実践の指導に活用できるようにす

る必要がある。さらに、人生の最終段階を生きる高齢者の安らかな死への支援として学生の死生観を醸成する教育方法、高齢者の尊厳を守る身体拘束しない援助の視点を引き出す教育方法の検討をする必要がある。

## V. 結 論

老年看護学実習を通して86名の実習記録から学生が捉えた老年看護の役割を分析した結果、8カテゴリーと23サブカテゴリーが生成され、以下のことが明らかになった。

学生が捉えた老年看護の役割は、【加齢や疾患を理解して普段と異なる変化を観察】【身体機能を維持して生活の質向上への支援】と、長い人生経験を持つ高齢者への関わり方として【自尊心や自信を支える支援】【意思を尊重した支援】であった。また、【気持ちに寄り添い、希望を叶える支援】【退院後、多職種が連携して高齢者と家族が安心して暮らせる支援】【認知症の人と家族が安心できる支援】を通して、【安らかな死への支援】であった。

高齢者観と老年看護の役割の関連を分析した結果、学生は高齢者を【外見と異なる身体の老化と病気】【気持ちが先走り無理をする】【安心できる住み慣れた場の暮らし】【セルフケアを通して生活維持を願う】と捉えたため、【加齢や疾患を理解して普段と異なる変化を観察】【身体機能を維持して生活の質向上への支援】を老年看護の役割としていた。また高齢者を【老化や病気がもたらす消極的な気持ち】【家族の力になりたい親の気持ち】がある反面、【積み重ねられた人生経験の強み】【家族が支える安心】と捉えていたため、【自尊心や自信を支える支援】【意思を尊重した支援】を老年看護の役割としていた。そして【気持ちに寄り添い、希望を叶える支援】【退院後、多職種が連携して高齢者と家族が安心して暮らせる支援】【認知症の人と家族が安心できる支援】を通して、【安らかな死への支援】が必要であると捉えていた。

## 謝 辞

本研究にご協力頂きました看護学生の皆様、実習指導の非常勤講師の皆様、ご指導いただきました実習施設の皆様に心より感謝申し上げます。

## 文 献

- [1] 太田喜久子：老年看護方法論の確立をめざして. 日本老年看護学会誌. 2003 ; 7 (2) : 4-8.
- [2] 大淵律子：老年看護学の看護実践力を高める教育の在り方. 三重看護学誌. 2009 ; 11 : 1-8.
- [3] 坂恒彦, 福田愛子, 池俣志保, 他：老年看護学実習における高齢者の生活を支える看護技術の実施状況及び課題. 看護学研究. 2019 ; 1 : 1-9.
- [4] 山之井麻衣, 松本佳子, 高野真由美：老年看護学実習における看護技術経験の現状と実践力強化をめざした技術教育について. 川崎市立看護短期大学紀要. 2010 ; 1 : 95-102.
- [5] 綿貫成明, 大町弥生, 辻村史子, 他：成人看護学実習及び老年看護学実習において看護学生が見学または実施した看護基本技術の実態－学生による自己評価調査の分析より－. 藍野学院紀要. 2008 ; 22 : 101-115.
- [6] 森田恵子, 永田美和子：老年看護学実習における看護技術体験率と技術教育のあり方. 桐生短期大学紀要. 2007 ; 18 : 49-54.
- [7] 長澤久美子, 福岡裕美子, 駒井裕子：老年看護学実習 後期実習における学生の学びに関する報告. 常葉大学健康科学部研究報告集. 2017 ; 4 (1) : 53-61.
- [8] 鈴木早智子, 清水千代子：老年看護学病院実習における学生の学び. 足利大学看護学研究紀要. 2021 ; 9 (1) : 31-43.
- [9] 森田恵子, 永田美和子：学生が老年看護学実習場面を通して捉えた高齢者看護観. 桐生短期大学紀要. 2006 ; 17 : 25-30.
- [10] 桑田恵美子, 山本和江：老年看護学実習を通して看護学生が捉えた高齢者観 (第1報).
- 仙台青葉学院短期大学紀要. 2022 ; 13 (2) : 103-111.
- [11] 谷津裕子：Start Up 質的研究. 第2版. 学研メディカル秀潤社. 東京, 2015, pp.98-140.
- [12] 萱野真美：質的研究実践ノート 研究プロセスを進める clue とポイント. 医学書院, 東京, 2008, pp.75-79.
- [13] 齋藤美華, 佐藤千穂：学生主体による高齢者の身体拘束に関する演習をととした学生の学び. 老年看護学. 2021 ; 25 (2) : 132-139.
- [14] 内閣府：平成30年高齢社会白書.  
[https://www8.cao.go.jp/kourei/whitepaper/w-2018/html/zenbun/sl\\_1\\_1.html](https://www8.cao.go.jp/kourei/whitepaper/w-2018/html/zenbun/sl_1_1.html) (2019年2月13日引用)
- [15] 加藤和子, 百瀬由美子：看護教育における看護学生の死生観に関する研究. 愛知県立大学看護学部紀要. 2009 ; 15 : 79-86.